The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アジア太平洋論叢 第20号　序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2014, 20, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100105
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序

日本は戦後70年を迎えようとしているが、社会のどの面を取り上げてみても、大きな転換点に立っていることがわかる。家族、共同体、行政、教育、福祉、政治、外交、国防などなど、自分の身近なところから少々手の届かないところまで見渡してみても、かなりの長い期間作用してきたシステムやレジームがもはや現実の諸問題に対応できなくなっていることに気付かせられる。

私は、偶々ある市の教育委員を務めているが、そのあり方については数年前の就任早々から疑問を抱いていた。教育委員会そのものが形式化し、教育の実際にほとんど貢献していないことを実感している。その最大の理由は、委員会制度そのものに欠陥があるとしかいいようがない。たとえば、委員の選任方法、権限をめぐる委員会と首長との関係、委員会の中での教育長の位置、さらには委員会の予算執行権の欠如などは、検討されねばならない重要課題であると思う。現在、政府で教育委員会制度の改革案が検討されているが、その案を見ても容易にこうした欠陥が改善されるとは思えないが、改革が必要であることは確かである。

海外を回ってみても、ほとんどの国で大きく社会が変容し、政治制度や社会制度がそれに対応できない状況が観察できる。例えば、タイのここ数年の政治的混乱は、表面的には赤シャツと黄シャツの対立と捉えることもできるが、その底流には1932年の人民党革命以後の支配層(王族、軍部、官僚)の相対的地位の低下とそれに代わる新しい資本家層や中間層（市民層）の出現がある。しかも、派や層を問わず、ほぼ社会全体を覆い尽くしている汚職文化が改革の足を引っ張っている。まさに、タイは旧体制から脱出に向けての大きな波長のうねりの中にあり、その先の到達すべき新体制の姿がまだはっきりせず、一歩でも前に進んだ民主化を求め悩み苦しみ時間を費やしているのである。

こうした状況を貫く適切なキーワードとして思いつくのは、「トランジション transition」である。世界は過渡期の真っ只中にあるのではなかろうか。もちろん、いつの時代も変化や変容はあるが、ここ10年ぐらいの間のそれは極度に広く深いように思う。

前号からずいぶん長い時間を要したが、『アジア太平洋学論叢　第20号』をお届けする。過渡期状況を取り上げた論文もいくつか含んだ好論文集になっていると自負している。大方のご叱正を乞う次第である。

2014年5月
会長　赤木　攻